

アーサー・ミラーと「魔女狩り」

——『るつぼ』の世界

荒木純子

論文要旨

1953年初演のアーサー・ミラーの戯曲『るつぼ』は、1692年のセイラムでの魔女狩りを扱ったものである。1940年代50年代にアメリカで起きたいわゆる赤狩りにも触発されたことが知られている。本稿は、現在も再演されることが多いこの古典作品の意義を、これまでのピューリタン研究の文脈にも照らし、1つの歴史解釈として検討してみる。1930年代にピューリタンの原典読み直しにより、ピューリタンはより人間的な存在として捉えられるようになった。さらに1960年代以降の新しい社会史の台頭により、セイラムの魔女狩り研究も17世紀末の社会的政治的不安への心因性の反応という観点から説明されるようになった。そのようなピューリタンの知識に照らしてみると、ミラーはこの作品の中で、意図した通りに事件の「本質」を描いているようである。そしてその「本質」が、今日不寛容になっている社会で、人々の心に強く響くのであろう。

キーワード【アーサー・ミラー、『るつぼ』、ピューリタン研究、魔女狩り、歴史】

はじめに

アメリカの劇作家アーサー・ミラー (Arthur Miller, 1915-2005) は、代表作の一つで、歴史的事件を扱った作品である1953年初演の戯曲『るつぼ』(*The Crucible*)の前書きとして、「この戯曲の歴史的正確さについての覚え書き」を記している。そこでミラーは、この作品が歴史研究者の使う意味での歴史を描いているわけではないことを断りつつ、人間の歴史の中で、もっとも不可思議かつもっとも恐ろしい出来事における「本質」(the essential nature)の1つを描いたと述べている¹⁾。

この作品の素材である歴史的事件とは1692年にセイラムで起きた、アメリカの最大で最後の魔女狩りである。この魔女騒動は、事件当時から現在に至るまで、数多くの人々の関心を集め、アメリカの歴史の1つの闇を示すものと捉えられてきた。そして、歴史研究者たちも多くの研究を残している。そのような事件における「本質」とはどんなものなのだろうか。

2016年10月、『るつぼ』は新しいプロダクションとしてBunkamuraシアターコクーンで上演された。それに先立ち、イギリス出身の演出家ジョナサン・マンビイ (Jonathan Munby) の意向により、キャストおよびスタッフに向け、『るつぼ』の舞台である17世紀

ニューイングランドの歴史的文化的背景を講義するという貴重な経験をした。マンビイの描きたいピューリタン像が「過激さ」(extremity)に象徴されることを当日知り、ピューリタンが一般的に、信仰を守るあまり人間らしい温かさに欠けるという厳しいイメージを持たれがちなことと合わせ、ミラーの言う「本質」とはなんであるのかを少し整理する必要があるように思われた²⁾。これを契機に、本稿では、1692年の魔女狩りを素材とする1953年に制作された『るつぼ』の意義を、これまでのピューリタン研究の文脈に照らしつつ、1つの歴史解釈として検討してみたい。

この『るつぼ』は1940年代50年代にアメリカを震撼させた非米活動(un-American activities)、すなわち共産主義の活動を封じるための、いわゆる赤狩りの影響を強く受けていることも知られている。そのことをミラー自身がいろいろな場面で語っているが、2005年に亡くなるまでの多くの機会でも語られた創作の意図は、必ずしも一致しているわけではない。たとえば、セイラムの魔女狩りについて書こうと思ったきっかけは、1995年出版の自伝から、マリオン・スターキー(Marion Starkey, 1901-91)の研究書であったことが読み取れる³⁾。また決定版と考えられているミラーの伝記においても、自伝のその箇所を根拠に、スターキーの研究書と下院非米活動委員会(The House Committee on Un-American Activities, HUAC)で行われていたことが似ているのに気づいたことが、創作のきっかけだとされている⁴⁾。一方、ミラー自身の脚本によって『るつぼ』が映画化された1996年、『ニュー Yorker』誌に寄せたエッセイの中で、ミラーは1865年出版の、当時セイラム市長だったチャールズ・W・アップラム(Charles W. Upham, 1802-75)の手による事件にかんする2巻本を読み、創作しようと思ったことを述べている⁵⁾。限られた時間や紙幅で渾身の作品に込めた思いを語りきれぬ訳もなく、その時々によって強調されるところも異なるであろうし、また時を経ても見方や感じ方は変わりうる。1996年の映画では、原作で会話に出てくるだけの森の中でのダンスの場面を、ミラーは映画の冒頭に持ってきて映像化した。そのほうが魔術の雰囲気が出るように思ったから⁶⁾という理由もまた、演じられる作品や表現したいものが固定された1つのものではないことを示すいい例であろう。

こうして『るつぼ』は再演や映画化を繰り返しているが、初演当初に酷評されたこともミラー自身が様々な場面で語っている⁷⁾。ためしに初日公演についての『ニューヨーク・タイムズ』紙の批評を見てみると、力強い作品だとみなし、1692年と当時の裁きのあり方との類似性を示唆している点は評価しているものの、理念が見られない自己満足の作品だとされている。そしてあまりに時代を批判することに気を取られたためか『セールスマンの死』(Death of a Salesman)ほどの芸術性はないという厳しい評価だった⁸⁾。この批評もあるいは、当時の抑圧された時代の雰囲気を反映し、時代批判の作品を肯定しがたかったと考えられなくもないが、脚本家を落胆させたことは間違いないだろう。しかし1年後の再演でヒットして以来、今や古典と呼べる作品となった。このような変化にも影響しているだろう「本

質」に少しでも近づいてみたい。

1. 下院非米活動委員会とアーサー・ミラー

『るつぼ』に描かれた「本質」にかかわる1つのヒントは、アーサー・ミラーの自伝からよく引用される箇所にあると思われる。1940年代50年代に首都ワシントンで行われていた、共産主義者をあぶり出して追放しようとする、下院非米活動委員会の公聴会の状況と、セイラムでの魔女狩りの状況が似ていたと指摘している箇所である。連邦捜査局は密告者から共産党員と考えられる者の名前を特定したいいわゆるブラックリストを持っていて、キリスト教会で言う、その反キリスト者を公聴会に呼び、告白と悔い改めを求めたとミラーは記述している。

……その公聴会の主たる目的は17世紀のセイラムとまさしく同じで、告発された者が公の場で告白し、そのいわば悪魔のマスターと仲間を非難すること、そして呪うべき古い誓いを破ることにより、立派な人たちとの新たな連帯を確実にすることだった。そしてその上で、きわめて品行方正な人たちの社会に戻ることが許されることになるのだ。このようにミラーは、非米活動委員会の公聴会のようすを「儀式的」(ritualistic)なものだと捉えている⁹⁾。

ミラーは1952年、『るつぼ』を書くためセイラムに調査に出かけようとした矢先に、1949年のヒット作『セールスマンの死』の演出を務めた友人のエリア・カザン (Elia Kazan, 1909-2003) から連絡を受け、非米活動委員会の公聴会で共産党員の名前を告げる決断をしたことを告白された。カザンは初回の召喚時には名前を告げなかったが、このとき2回目の呼び出しを受け、決断したのだった¹⁰⁾。このことにより、カザンはその名に傷をつけることになった。ミラーは自分の名前もその中に含まれているのだろうと思い、恐怖で一瞬震えたが、カザンに対して憎しみや軽蔑を感じなかったことをのちに語っている。共産主義者だと疑われた場合、名前を告げないと、仕事をはじめ、すべてを奪われ、人間らしい生活を送れなくなることはミラーも理解していた。しかしこのカザンを追い詰めた非米活動委員会による追及を身近に感じ、『るつぼ』を書かなければいけないと思ったと回顧している¹¹⁾。

ミラーが、自分の名前が連邦捜査局のブラックリストに載っていることを知ったのは、『るつぼ』初演の翌年、ベルギー初演公演への招待で渡航しようとパスポートの更新を申請したところ、認めらなかった時のことだった。さらに後に判明したことは、連邦捜査局に彼が目をつけられていたのは1951年の時点で、ミラーの出生証明書にある名前がアーサーではなくアントン (Anton) と外国生まれのような響きを持っていたため、別名を使って活動していると疑われたことだった¹²⁾。そのような状況でミラーは1954年、公聴会に呼ばれることにもなった。ミラー自身が共産党員の疑いをかけられ、魔女として告発された人たちと同

じような状況に置かれたのである。

このような経緯が広く知られているため、『るつぽ』はアメリカ文学史の中で、1950年代に猛威を振るったマッカーシズムを批判する作品だと大きく捉えられているようである。ノートン社のアメリカ文学アンソロジーの最新の第8版では、前記のミラーの自伝のまさしく同じ部分を引用した上で、「このことから『るつぽ』(1953)は誕生し、主人公のジョン・プロクターは、自分の名前を署名に使うことで子孫の尊厳を手放すことよりも、処刑されることを選んだ」と紹介している¹³⁾。この紹介は、第8版の約10年前の第6版においても全く同じ文面なので、『るつぽ』はマッカーシズムによって生まれたマッカーシズム批判の作品であるという、大枠の理解が定説であると考えていいだろう¹⁴⁾。

ただ、『るつぽ』の舞台が1692年のセイラムであるため、その社会秩序を定めていたピューリタニズムの不寛容さが、劇中では際立つ。『るつぽ』はアメリカで多くの高校生が読むことになるので、この作品から、ピューリタンは不寛容であるという印象を持っている人も多いのではないと思われる。しかし、ミラーの自伝のこの有名な部分の直後を読むと、ミラーにとってはセイラムの魔女狩りよりもむしろ、マッカーシズムに対する違和感が強かったように思われる。セイラムのピューリタニズム社会で行われた魔女裁判という制度のほうが、マッカーシズムで行われていた公聴会よりも、まだ法的根拠があると述べているのだ。それは、セイラムでは被告が仮に汚れたもの(Unclean One)と通じていたとしたら、宗教的のみならず社会的にも犯罪であった魔術の実践という罪を犯したことを意味したからである。一方で、非米活動委員会での訴追は、何らかの法律に違反しているというものでもなく、単なる思想的な犯罪(spiritual crime)であり、政治上の敵の欲望とイデオロギーへの傾倒、すなわち共産主義思想を持つことに過ぎないからだという¹⁵⁾。このように、自伝を読む限りではミラーはむしろ、思想の自由を認めなかった1940年代50年代の社会への抵抗感を強く感じているようだ。罪を定めた法があったピューリタンの時代とは異なり、非米活動委員会は法的裏打ちのない、たんに恐怖に支配された政治的な動きであったとミラーは感じている。そのような空気を作り出した雰囲気をもピューリタン社会にも見て、「本質」を描こうとしているように思われる。

この『るつぽ』は、ミラー自身も認めているように、よく再演される戯曲である。2016年には日本だけでなく、アメリカにおいても再演された。アメリカでの再演は2002年に次ぐもので¹⁶⁾、前年2015年のミラー生誕100周年の、回顧の一環であった¹⁷⁾。このニューヨークのブロードウェイでの3月からの公演に先立ち、『ニューヨーク・タイムズ』紙では、政治的ヒステリーで荒れる社会の批判として読めるこの作品が、ちょうど2016年の大統領選挙の予備選挙のまっただ中で、アメリカ的でないものに罪を被せるような不寛容な言説が飛び交う状況と不穏に響き合うことを指摘している¹⁸⁾。またこの新しいプロダクションの演出家イヴォ・ヴァン・ホーヴェ(Ivo van Hove)も、『るつぽ』が時代物ではあるものの、

現在のアメリカ社会に当てはまるものがたくさんあることを意識している¹⁹⁾。

日本での新しいプロダクションの演出家のジョナサン・マンビィも、作品の設定時期を超越した「政治と宗教の過激主義、そして恐怖や疑いのたちこめた時代」の観客に語りかける作品であることを語っている²⁰⁾。そして「日本の観客の胸に響くのは、戯曲の普遍性もさることながら、いま社会に回帰している不寛容な同調圧力と物語が共振するためでもあろう」という舞台評に見られるように、日本においても『るつぼ』は、政治的社会的に不寛容な雰囲気が漂う時代に合う演劇だという評価を得ている²¹⁾。

ほかにも、ミラーの体験では、中国の女性作家が予備知識もなく『るつぼ』を見て文化大革命を思い出し、中国人でないのにこの作品を書けたのは信じられないと伝えに来たというエピソードがある²²⁾。中国のほか、アルゼンチン、チリ、ギリシャ、チェコスロヴァキアはじめもっとたくさんの国でヒットした状況を鑑みて、「社会的存在としての人間の脳にあたかもすり込まれているかのように繰り返して起きる、熱狂や妄想の猛威により人間が犠牲となってしまう、原始的な構造を提示しているようだ」とミラーは分析している²³⁾。

このように、『るつぼ』で描かれていることは時代や国をも超え、不寛容な社会に生きる者への警鐘あるいは反省として普遍性を持っていると考えられるが、不寛容さの根源はやはりその素材であるピューリタン社会が持つイメージが大きいことは否定できないだろう。ミラーが、前からセイラムの魔女狩りについて書きたいと思っていて、非米活動委員会のために書いたわけではないと言っていることもあり²⁴⁾、また本人が歴史家の立場から書いたわけではないと断ってはいるものの、セイラムの魔女狩りの歴史研究として優れているといえるので²⁵⁾、『るつぼ』で不寛容な印象を与えるピューリタン像に注目し、ピューリタニズム研究としての側面を検討してみることにする。

2. アーサー・ミラーのピューリタン観

『るつぼ』初演の数日前に行われた、アーサー・ミラーと演出のジェド・ハリス (Jed Harris) へのインタビューからは、ミラーが執筆の際に持っていたであろうピューリタン観が読み取れる。それによると、罪は罪であるとし、人間らしい対応をとることができない、融通の利かない人々だとミラーは考えているようだ。そして、とくに初期のピューリタンを「狂信者」(fanatics) と呼び、「ふつうの人であれば『黒い服を着て、子どもにあれほど厳しいしつけをするあの人たちは、いったいどうかしてしまったのか』と問うであろう」と言っている²⁶⁾。このようにピューリタンが黒い服を着ていたというのは、19世紀の作家ナサニエル・ホーソーン (Nathaniel Hawthorne, 1804-64) が描くピューリタンの時代を舞台とした作品によって広まったと考えられている。たとえば1630年代のボストンを舞台とした1850年の長編小説『緋文字』(The Scarlet Letter) の第1章のまさしく冒頭の部分に、「悲

しみの色の服と、ねずみ色のとがった帽子を身につけた、ヒゲを生やした男たち」が登場する²⁷⁾。そのような『緋文字』では、不義の子どもであるパールを、マサチューセッツ湾植民地の総督が厳しくしつけようとしているし、姦通の罪を犯した主人公ヘスター・プリンに対しては厳しい視線がつねに向けられている。ミラーが語っている厳格なピューリタン像は、ホーソンが作品の中で追究したピューリタン像と重なり合う面がある。

また、ホーソンが展開したような厳格なイメージをもってピューリタンを激しく批判し、そのイメージをさらに広めた人物は、第1次世界大戦前後にジャーナリズム界で活躍した、批評家のH・L・メンケン(Henry Louis Mencken, 1880-1956)である。アメリカ文化を批評した代表的エッセイ集『前書きの本』(*A Book of Prefaces*)の、もっとも有名なエッセイ「文学的勢力としてのピューリタニズム」(“Puritanism as a Literary Force”)において、メンケンはピューリタンの厳しいイメージを辛辣なことばで攻撃し、彼らの精神がのちの作家たちの創造力にも引き継がれ、アメリカ文学の作品が損なわれたと結論づける。

……ピューリタンが審美的感覚を全く持っていないこと、あらゆるロマンティックな感情を信用していないこと、異論に対して飛び抜けて不寛容なこと、冷たくて偏狭な自分のものの見方を確固として信じていること、野蛮な残酷さで攻撃すること、つねに野蛮な迫害を求めてうずうずしていること——これらによって、アメリカ合衆国における意見の交換に、とくに意見交換をする目的で意見を表明するときのあり方に、ほとんど耐えがたいほどの重荷がかかったのだ²⁸⁾。

このように、ピューリタンがキリスト教の教えを厳格に守るあまり、それ以外のことには一切関心を持たず、教えを守っていない人を探し出しては厳しく批判しているという印象を、メンケンはあらゆる側面から強調して伝えている。

このようなピューリタン観は、ピューリタンが残した原典を読み直し、新たなピューリタニズム研究が発展した1930年代から少しずつ変わっていった。1920年代にすでにケネス・マードック(Kenneth Murdock, 1895-1975)やサミュエル・エリオット・モリソン(Samuel Eliot Morison, 1887-1976)などにより、ピューリタンに敬意を払い、彼らの残した文章を丹念に読んだ上で書かれた伝記や歴史書が出版されるようになっていたが、最大の功績はそのふたりの影響を受けた、思想史研究者のペリー・ミラー(Perry Miller, 1905-63)にある。ペリー・ミラーはピューリタンの思想に注目し、思想史の文脈で研究した。そしてさらに「アメリカ研究」という研究分野が切り開かれる結果となった²⁹⁾。

1933年に出版されたペリー・ミラーの最初の本『マサチューセッツにおける正統』(*Orthodoxy in Massachusetts*)は、メンケンと並んで不正確で偏ったピューリタン批評をしていたジャーナリストのジェイムズ・トゥルズロー・アダムズ(James Truslow Adams, 1878-1949)による、1920年の『ニューイングランドの建設』(*The Founding of New England*)に対する応答である。イングランドとアメリカの思想としてのピューリタニズムの連

続性を唱え、アダムズが主張するような経済的な理由が主でピューリタンは大西洋を渡ったわけではなく、イングランドで温めていた宗教的政治的立場をアメリカに伝えたことをミラーは主張している³⁰⁾。そこで指摘されているのは、ニューイングランドに渡ってきた人たちの主流派は、イングランドでイングランド教会内にとどまって自分たちの信条を守っていた人たち、必ずしもイングランド教会を飛び出して自らの信仰を守ろうとしたわけではない穏健派の人たちであったことだ。その点、アーサー・ミラーが前述のインタビューでまとめていたような、初期のピューリタンが狂信者であったとは一概に言いがたい。それにピューリタンといってもみんなが同じ思想であったわけではなかったことを、ペリー・ミラーは強調している。

この『マサチューセッツにおける正統』が1959年に再出版されたとき、ペリー・ミラーは新しい序を加え、元々この研究を始めたのは「H・L・メンケンが感情的空間を占拠している」ときであったことを語っている。「ピューリタン」ということばは当時アメリカの文明の中で「非難に値する」(reprehensible)と思われるすべての傾向に対しての「包括的な軽蔑」(comprehensive sneer)を象徴することばだったというのだ。具体的には検閲、禁酒法、キリスト教原理主義、政治的偽善などを指し、アメリカ初のノーベル文学賞受賞者となった作家のシンクレア・ルイス(Sinclair Lewis, 1885-1951)が、とくにそれらを嘲笑して批判していたことを語っている³¹⁾。このペリー・ミラーの本を、ピューリタンの新しい研究が進んでいたはずの1959年でも改めて出版する価値があり、またこの序がついているということは、1953年の『るつぼ』初演時にもメンケンらの残したピューリタンのイメージは当然ながら残っていたに違いない。

『るつぼ』における、ピューリタンの人間的な冷たさは、主人公のジョン・プロクターと妻のエリザベスとの関係にもっとも凝縮して描かれているように思われる。信心深く、神の教えを守ることを務めだと考えているエリザベスに対し、プロクターは近づきたい、心を開けない雰囲気を感じている。とくに2人の間にわだかまりがあるのは、メイドとしてかつて住み込んでいたアビゲイル・ウィリアムズとプロクターが1度だけ関係を持った点である。プロクターはエリザベスにそのことをつねに責め立てられているような気分である。

プロクター もういい！ 最初におまえが疑ったとき、どなりつけたってよかったんだ。だが、おれは、やましきから、キリスト教徒らしく告白した。告白したんだぞ！ 何か夢をみて、あの日おまえを神様と思い違いをしたのだ。ところが、おまえは神様ではない、違う、これをおぼえておけ！ たまにはおれのいいところも見て、責めたりするのはやめるんだ。

エリザベス あたしは責めてなんかいません。責めているのは、あなたの心の中にいる裁判官よ。あたしはいつもあなたをいい人だと思っているわ、ジョン——（微笑をうかべ）——ただ魔がさしただけ³²⁾。

エリザベスはキリスト教徒として善悪の判断は神がするものだという前提に立っているので、プロクターが望むような、自分が許すという表現で慰めることはしない。感情よりも原則に基づいているため、エリザベスが冷たく見える場面である。

この姦通が原因となり、ミラーが創作した中でもっとも大きな山場へとつながる。モーゼの十戒に反するこの行為は、ピューリタン社会においては罪にあたるため、当事者たちは隠しておきたいものである。しかしアビゲイルがエリザベスを魔女であると告発したため、プロクターはその罪を法廷で自ら告白する。その告発は、エリザベスを絞首刑にすることによりプロクターへの思いの成就を願うアビゲイルが言い立てた嘘であり、魔術とは全く関係ないことを証明するためであった。その真偽を判断するために法廷に呼ばれたエリザベスは、プロクターの言い分を本当かどうか問われ、迷いながらも本当ではないと嘘の証言をしてしまう³³⁾。初めて相手の状況を思いやった行為、キリスト教徒としての教えを破ってまでついたエリザベスの嘘が、裏目に出たのだった。当然のごとく、厳格な判事はエリザベスの証言を採用し、プロクターはアビゲイルを陥れようとしていることにより、魔女と認定されることになるのだ。

現実のピューリタン社会では、婚姻内の性交は神の教えを守るものとして奨励されており、他方、婚姻外の性交は死罪とする法律をもって禁じられてはいたものの、実例として多数あったことを、歴史研究者エドモンド・モーガンが早くも1942年の論文で明らかにしている³⁴⁾。夫婦間の肉体的交わりを含めた愛をうたった詩を残している、アメリカ初の詩人であるピューリタンのアン・ブラッドストリート作品を読んでも、メンケンたちが批判したような人間味のないピューリタン像からはほど遠い。

モーガンはのちの1985年に、アーサー・ミラーの『るつぼ』の歴史的な描写について、ピューリタンの実像とは異なっていることを指摘している。そして、文学作品の審美的価値を優先したことに理解を示しつつ、『るつぼ』の最後でプロクターが魔女であるという告白を拒否し、仲間の魔女の名前を告げることも拒否して絞首刑となることを、ピューリタニズムを否定して超越したと捉えるのは間違いだと強調する³⁵⁾。つまりミラーの『るつぼ』をピューリタニズムの偏狭さとして読むのは間違いで、プロクターはピューリタンではあるが、ピューリタンとは切り離して、ひとりの人間の葛藤として読むべきだということである。1985年でもやはりピューリタンの厳格なイメージが根強く残っていたということで、そのイメージは容易に『るつぼ』から得られるということがわかる。

一方で、アーサー・ミラーは、セイラムの魔女狩りに加担してしまったマサチューセッツの人々を「ごくふつうの人々」(quite ordinary people)だと考えていることも、初演前のインタビューで語っている。そのような人々が、現実にはめったに起こらない悲劇を始まりから終わりまで体験していたことが興味深く、丸ごと書ける素材として興味があったという。しかも、その悲劇を、民主主義を得るために必要だった「英雄的な反乱」(the heroic

revolt) と捉え、政府と教会が実質的に1つとなっていたマサチューセッツの神権政治 (theocracy) にかんし、「セイラムで起こった、そのような英雄的な反乱がきっかけとなり、教会の力が敗れ、マサチューセッツは民主主義的な政府へと発展したと一般的に考えられる」と述べる³⁶⁾。こうしてみると、ミラーはセイラムの事件そのものやピューリタンの宗教的な態度よりも、ピューリタンの政治的形態に関心があったようである。

続けてミラーは、セイラムでの「反乱」がそのままアメリカの民主主義の発展の説明にはならないことは認めているものの、セイラムで自分は魔女であるという告白をしなかった人々の行為を「専政に抵抗した伝説」(legend – a resistance to tyranny) だとし、「これは私たちの国の一部だった——決して誰も二度と繰り返してはいけない、長い間、誰も繰り返すはずはないという警告だった。彼らはそこから学んだのだから」と熱を込めて語る³⁷⁾。ミラーが、セイラムでの事件を世俗的に捉えていること、そしてその世俗的な大事件の中に、アメリカの根幹をなすと考えられる民主主義を、一般市民が専政に抵抗して勝ち取るきっかけになった事件だと捉えていることがうかがえる。信じる者としてのピューリタン像は表れていないが、ピューリタンの残した記録に表れる、抵抗した者たちの証言に寄り添った反応として、ミラーのこの発言は興味深い。キリスト教に対する共感がまったく読み取れないのは、当時の思想としてのピューリタニズム研究の状況以上に、あるいはミラーがキリスト教会にはかかわらない、ユダヤ教徒であったからかもしれない。ミラーの自伝を読むと、ユダヤ教徒としての意識が隔々にまで行き渡っている。しかしそのような、民主主義を勝ち取ることにかんする熱の入り方には、ミラーの言う、歴史的事件の中の「本質」の片鱗を見てもいいだろう。

3. セイラムの魔女狩り研究

アーサー・ミラーがセイラムの事件について書くきっかけとなったのは、マリオン・スターキーとチャールズ・アップラムの2つの研究を読んだことであることは先に述べたとおりである。とくにミラーは、1949年に出版されたスターキーの『マサチューセッツの悪魔』(*The Devil in the Massachusetts*) を興味深く読んだようだ。スターキーは歴史研究の教育を受けた人物ではなく、ミラーも参照した1867年のチャールズ・アップラム『セイラムの魔術』(*Salem Witchcraft*) と、1892年出版のウィンフィールド・ネヴィンズ (Winfield S. Nevins) 『セイラム・ヴィレッジの魔術』(*Witchcraft in Salem Village*) の2つを先行歴史研究として挙げ、出版当時には知られていなかった資料を使った。その際にスターキーは、大学院の2つの授業で学んだフロイト学派の精神分析を使い、このセイラムの事件が持つ「ギリシャ古典のような悲劇」を発掘しようとしている³⁸⁾。その結果として、この本は少女たちの集団ヒステリーのようなようすなど、物語として興味深く読める面があり、現在でも版を重ねて

いるようだ。

また、スターキーのこの本はセイラムの魔女狩りにかんする本で、日本語に翻訳されている2冊のうちの1冊でもある。出版されたのは1994年と、原著出版の半世紀近くも後のことだが、翻訳者はその後書きで、この本がセイラムの魔女狩りにおける人々の心理が生き生きと描かれていること、また翻訳されているもう1冊の本に偏りがあるため日本の読者に誤解が生じるのは望ましくないと、その時点で翻訳した理由を2点挙げている³⁹⁾。もう一冊の本とは、1969年に出版されたチャドウィック・ハンセン (Chadwick Hansen, 1926-2011) の『セイラムにおける魔術』(*Witchcraft at Salem*) で、スターキーの集団ヒステリーの扱い方が不正確であると批判し⁴⁰⁾、それを踏まえ、セイラムで起きていた魔術の詳細を明らかにした研究で、翻訳が出版されたのは1991年のことであった。スターキーの翻訳者は、むしろ少女たちの集団ヒステリーから大人たちにも狂気が広まり、無実の人々が次々に有罪となっていく流れを劇的に描くスターキーの本を評価し、今も読むに値する本だと判断している⁴¹⁾。このように、セイラムの魔女狩りはまず、魔術という不可解なものに加え、人間関係、狂気という点が人々の関心を引きつける。

実際にミラーの『るつぽ』においても、少女たちの狂気、集団ヒステリーのようすは目を引き、劇中の山場の1つでもある。アビゲイルに代わり、プロクター家に住み込んでいるメイドのメアリ・ウォレンが、少女たちは悪魔に取り憑かれた振りをしているだけだと法廷で告白したとき、アビゲイルやほかの少女たちが突然悪魔に取り憑かれる。判事のダンフォースに反論をしている最中のことである。

アビゲイル (あからさまに脅かすような口調で) ご用心なさい、あなたも、ダンフォースさま! 自分は偉いから、悪魔の力など、とても及ばないとお考えなのですか? ご用心! ここは——(突然、詰問するような態度をやめ、顔をめぐらし、上空をじっと眺める——その顔は本当におびえきっている)

ダンフォース (心配そうに) どうしたのだ?

アビゲイル (空中を見回しながら、寒そうに、両腕で自分の体を抱きしめるようにして) わか——わかりません。風が、冷たい風が吹いてきました。(目をメアリ・ウォレンにおとす)

メアリ・ウォレン (おびえて、嘆願する) アビー!

マーシー・ルイス (ぶるぶる震えながら) 閣下、いまにも凍りそう!

プロクター うそだ!

ホーソーン (アビゲイルの手にさわり) 冷たい、閣下、さわってごらんなさい!

マーシー・ルイス (歯をがちがちさせながら) メアリ、あんたがこの影を送ってくるの?

メアリ・ウォレン 神様、お助けください!

スザンナ・ウォルコット 凍りそう、凍りそう！

アビゲイル (はっきりと体をぶるぶる震わせながら) 風よ、風のせいだ！

メアリ・ウォレン アビー、やめて！⁴²⁾

アビゲイルとほかの少女たちが突然なにかに取り憑かれたような状態になるのも恐ろしいが、同時にメアリ・ウォレンがその犯人、つまり魔女にされそうな状況に一変するのまた恐ろしい場面である。舞台上演じられると、なおのこと効果的だろう。

このスターキーの本は、しかし1960年代以降の新しい社会史研究の流れの中で、批判を受けている。その皮切りで、セイラム魔女狩り研究の真の意味での初の歴史書と考えられているのが、1974年に出版されたポール・ボイヤー (Paul Boyer) とステイーヴン・ニッセンバウム (Stephen Nissenbaum) による共著『取り憑かれたセイラム』(*Salem Possessed*) である。これまで見過ごされてきた地域のさまざまなデータを用い、また、事件の発端の悪魔に取り憑かれた少女の父親で、舞台となったセイラム・ヴィレッジの教区牧師であったサミュエル・パリス (Samuel Parris, 1653-1720) の説教の手稿も読み、それらをセイラムを取り巻く社会と関連させ、魔女狩りとはなんだったのかを描き出そうという研究である。パリスのお金への執着、裏切り者のユダがお金のためにキリストを売ったことを強調する説教などから、新興都市セイラム・ヴィレッジとその隣の貧しいセイラム・タウンとの経済格差を生んだ、この時期の市場発展による不安が告発者と非告発者の関係に見てとれることを、財産データも示しつつ明らかにしている。ボイヤーとニッセンバウムは、スターキーの本を出版当時の研究として、またドラマティックな物語として評価しつつも、「ときに創造力に富んだ装飾」が見られ、アメリカ社会で当時起きていたもっと重要な出来事である市場革命が意識できていないことを指摘する⁴³⁾。

その点、『るつぽ』の中で、パリスがお金や財産に執着の強い人物と描かれているのは興味深い。薪代が支給されないと不満をこぼすパリスに、教会員のジャイルズは反論する。

ジャイルズ 薪を買うのに、年六ポンドをもらっておろうが、パリス牧師。

・・・

プロクター 本俸が六十ポンド、プラス薪代六ポンド——

パリス 本俸が六十六ポンド、プロクターさん！ そこいらの、本を小脇に説教する、百姓あがりとはわけが違う、わたしはハーバード大学を出ているのだ。

・・・

プロクター この家の権利書をよこせと要求した牧師は、パリスさん、あなたが初めてですよ——⁴⁴⁾

一見、魔女狩りとは縁がなさそうな、金銭をめぐる教区牧師と教会員の衝突の詳細をミラーがあえて取り上げて物語に入れているのは特筆に値する。ボイヤーとニッセンバウムが、ミラーの『るつぽ』をそれ以前の歴史家たちより優れた「歴史研究」とであると評価しているの

も納得できる⁴⁵⁾。

このボイヤーとニッセンバウムの研究の後にも、セイラムのこの事件や少女たちの悪魔憑きにかかわる歴史書は次々に出版されている。1982年のジョン・デモス(John Demos)による『サタンに仕える』(*Entertaining Satan*)では、悪魔に取り憑かれた少女たちはピューリタンの社会では女、年少、信徒、メイドという点で何重にも抑圧を受ける存在であったことを指摘し、故意だったかそうでなかったかは判断しようのないものの、悪魔憑きはそのはけ口としての身体現象と考えられることを指摘している。1987年のキャロル・カールセン(Carol F. Karlsen)の『女にかたどられた悪魔』(*The Devil in the Shape of a Woman*)では、魔女として告発された人に年配の裕福な女性が多く、財産権を持たないはずの女性が寡婦となったときの財産所有という、社会構造上の問題の存在を指摘している。1989年にデイヴィッド・ホール(David D. Hall)は『驚異の世界、審判の日々』(*Worlds of Wonder, Days of Judgment*)で牧師と一般の信徒との魔術に対する認識の違いを指摘し、両方が混じり合う中、教会の筋書き通り人々は悪魔との契約を告白し、悔い改め、その結果キリスト教共同体が浄化され結束が高まる効果を指摘している。1992年のリチャード・ゴドビア(Richard Godbeer)の『悪魔の支配』(*The Devil's Dominion*)はピューリタンが日常的に魔術と反魔術(countermagic)を頼みにしていたようすを描く。1998年のジェイン・カミンスキー(Jane Kamensky)の『ことばの支配』(*Governing the Tongue*)では、公共空間での女性の果てしないおしゃべりと魔女の関係を明かす。そして2002年にはメアリ・ベス・ノートンが『悪魔のわな』(*In the Devil's Snare*)で、植民地がつねにネイティヴ・アメリカンとの争いの恐怖にさらされていたことと異教徒のネイティヴ・アメリカンと悪魔が結びつけて考えられたことを指摘し、遠くメインのフロンティアの戦いで負けた軍人に関係する人たちが魔女として訴えられたようすを描く。これらは、スターキーやアーサー・ミラーが行ったようなセイラムで起きた事件の物語を追うよりも、事件の起きた社会の置かれた状況、社会が大きく変革し不安定なときに、人々の心に働きかける要素を分析しているのが特徴といえる。17世紀末はちょうどイングランド本国の名誉革命に伴う政治変動でニューイングランドも王領植民地となり、政治支配体制が大きく変わったため、そもそも人々の間に緊張が漂う時期であった。

こうしてセイラムの魔女狩りについては研究され尽くされたように思われていた2014年、新たな研究書が出版された。エマソン・ベイカー(Emerson Baker)の『魔術の嵐』(*A Storm of Witchcraft*)はこれまでの告発者と非告発者の関係に焦点を当てるが多かった研究を網羅するだけでなく、魔女狩りが収束に向かった後の時代も追い、セイラムが世界で唯一の「魔女の都市」(Witch City)と呼ばれるようになり現在にいたるようすを描く。魔女狩りが、明らかに無実の人を絞首刑にするシステムであることは1692年当時、すでに批判的であった。ところが、魔女の存在を教義上信じ、許されない魔術の罪人を追及した自

分たちの行いが正しかったとする牧師たちは素直に謝罪することなく、政府は事件を隠蔽する形で幕引きしようとしたのだ。そうした中、無実の犠牲者たちの遺族が社会的法律的な汚名を返上することを訴えたものの、認められるようになったのはようやく1703年になってからであった⁴⁶⁾。その間、植民地内だけでなく国際的にも、このセイラムの魔女狩りは暴力的な不寛容さ、妄想、ひどい迫害というイメージとともに広まった。この事件を批判していた商人のロバート・ケイレフ (Robert Calef, 1648-1719) が書いた本も、植民地の印刷所は政府を恐れて出版を断ったほど、植民地政府の態度は強硬だった。ようやく1700年になってロンドンで出版され、イングランドやフランスでもこの出来事は印刷物を通じて広まっていった⁴⁷⁾。

さらに19世紀半ばになると、前述の作家ナサニエル・ホーソーンがセイラムのイメージ定着にも一役買うことになる。セイラムの魔女裁判にかかわった判事の子孫にあたるホーソーンは、祖先がアメリカ史上に残した汚点として魔術を小説に繰り返し描き、セイラムといえば魔術というイメージを伝えることになる。『緋文字』出版の翌年1851年に出版された魔術の話、『七破風の屋敷』(*The House of Seven Gables*)のモデルとなった家もセイラムにあり、現在一般公開されている。その頃には、牧師でもあった前述のチャールズ・アッパムにより歴史的な研究も始まった。このようにしてセイラムは文学的歴史的素材の舞台となり、旅行者も増え、ガイドブックまで出版されるようになった。しかし、政府が事件の責任を認めない一方で、セイラムを純粹な観光で訪れる人が増えていく状況は、小さなコミュニティで起きた事件の犠牲者と告発者の子孫たちの間に複雑な思いと分断を生むことにもなった。1892年に事件から200年を迎えて記念碑を建てるという話も実現せず、またこの地域の財政困難のため、20世紀に入っても過去と向き合う動きはなかなか進まなかった。そうして1949年にマリオン・スターキーのベスト・セラーの出版、マッカーシズムに触発された1953年のアーサー・ミラーの『るつぼ』により、人々の注目が再度セイラムに集まることになったのだ⁴⁸⁾。

ミラーの『るつぼ』の成功により、汚点と考えられていたセイラムの事件を公に語ることに抵抗が減り、追悼しようとする機運も強くなってきた。作品執筆のための取材時には地元の人が全く協力してくれなかったと、ミラーはのちに語っているが、それとは状況が変わったのだ⁴⁹⁾。また、セイラム・タウンで魔女狩りを商品化する動きも加速する。とくに人気テレビドラマ「奥さまは魔女」(“Bewitched”)の1970年のいくつかのエピソードの撮影場所としてセイラムが選ばれ、全米の話題となった。その大成功により魔女狩りの商品化は進み、1972年にセイラム魔女博物館 (Salem Witch Museum) が作られ、1982年にはハロウィンと魔女を結びつけたフェスティバルまで開催されるようになる。元々セイラム・タウンであった、現在のセイラム市は、いわばテーマパークのような売り出し方をして経済効果を図ったのだ。事件の元々の発生地であるセイラム・ヴィレッジは1752年にダン

ヴァースという名前に改名したため、人々の記憶から切り離され、また博物館などが作れるようなセイラム・タウンほどの財力もなかったため、魔女狩りを商品化することにはいたらなかった。このようなセイラム・タウンとセイラム・ヴィレッジをめぐる魔術ツーリズムと呼ぶべきもののおかげで、セイラムの魔女狩りの犠牲者を思う者たちの中の緊張感はまだまだ続いている⁵⁰⁾。

セイラムはこのような軌跡をたどることになったが、ベイカーはこのセイラムの魔女狩りの収束が、結果的にピューリタンが行っていた神権政治を終わらせることになったことも指摘している⁵¹⁾。ミラーが『るつぼ』初演前のインタビューで語っていたように、悲劇の中の英雄的な行為により、神権政治が終わり、アメリカの民主主義への第一歩になったことをイメージしていたことと、まさしく同じ考え方である⁵²⁾。

1992年にセイラムの魔女裁判から300年を記念する式典を行う準備にあたり、1991年11月14日、ミラーは『るつぼ』執筆のためにセイラムを訪れた1952年以來の再訪を果たした。そのときのインタビュー映像で、セイラムが「魔女の都市」と呼ばれることにコメントを求められたミラーは、事件を矮小化し、無実の人を商業主義にさらすのは悪趣味 (bad taste) だと発言している。そして、セイラム市が300周年の式典を行うにあたり、一番念頭に置いて欲しいことを問われ、「自分の良心を譲ることなく、犠牲となった人たちの勇気だ」と答えている⁵³⁾。

ダンヴァースでも同じく300年を記念する1992年に、慰霊碑が建てられた。その場所は一連の魔女狩りの最初の裁判が行われた、かつてセイラム・ヴィレッジの集会場があった場所の向かい側である。いかにもアメリカの郊外らしい広々とした空間の、車も人もめったに通らない場所にひっそりと位置している。ベイカーが、ダンヴァースの慰霊碑はそのようにほうっておかれて満足げだとコメントしているのが印象的である⁵⁴⁾。



ダンヴァースにある、1692年セイラム・ヴィレッジ魔女狩り犠牲者の慰霊碑 (2016年8月21日筆者撮影)

おわりに

アーサー・ミラーが『るつぼ』を創作したときの思いを、素材となっているピューリタンについての研究史に照らしてみると、「ピューリタンの」(puritanical) ということばもある

とおり、否定的に捉えられやすい、キリスト教会の教義に忠実なあまり他人に厳しいというような、誤解されたピューリタン像に基づいているようではある。しかし、1692年のセイラム魔女裁判の記録や説教などの歴史資料を実際に読み、その中に表れる人々の「声」を聴いたミラーは、狂気と恐怖が支配する環境に抵抗し、無実の罪で命を落とした主人公ジョン・プロクターをはじめとする人々の姿を描き出した。結果的に教会の過ちという結論を導き、政治的権力から教会を切り離すきっかけを作った英雄的な人々に、キリスト教の罪である魔術にかんする事件を扱っていながらも、ミラーは市民の民主主義的行動の端緒を認めている。このように考えると、ミラーの言う「本質」とは、歴史研究者エドモンド・モーガンが強調するような、プロクターというひとりの人間の、狂気と恐怖の中での葛藤を克服し、正しいことを貫こうとするその姿勢が近いのかもしれない。

そして、ミラーの『るつぼ』という1つの歴史解釈が与えた影響もまた興味深い。一部、魔女ツーリズムと呼ぶべき方向にも向かったが、『るつぼ』の成功により忌避感が薄れ、人々が正面からセイラムの過去と向き合えるようになった意義は大きい。そして再演されるたびに、『るつぼ』はその「本質」が不寛容さに取り巻かれている人々の心に響いている。

そんな折り、2017年5月18日、アメリカのドナルド・トランプ大統領は、ツイッター上で「アメリカ史上、もっともひどい政治家の魔女狩りだ」と発言した⁵⁵⁾。前年の大統領選挙活動の際、ロシアと取引し対立候補のヒラリー・クリントン陣営を妨害したという疑惑を調べる特別捜査官が任命されたことへの反応である。前任のバラク・オバマ大統領への疑惑や、クリントン陣営にかんする疑惑のときには特別捜査官は指名されていないのに、自分だけが攻撃にさらされているという認識である。さまざまな人がそれを、妥当性を欠くものだと否定し批判した。なかでも、前述の歴史研究者メアリ・ベス・ノートンは『アトランティック』誌のインタビューにおいて、「魔女狩り」という用語の意味としては間違っていないが使い方が興味深いと答えている⁵⁶⁾。エマソン・ベイカーによると、「魔女狩り」ということばは1930年代までにすでに、政治的に攻撃されたときに比喩的に使われ、その後もセイラムの呼称とともに過激な政治的追及のシンボルになっていたという⁵⁷⁾。ノートンももちろんセイラムの事件との関連から、自分が非難の対象になっているのは不公平だという認識の元で使われる用法であることを指摘している。今回興味深いのは、ノートンも言うように、トランプ大統領が自分に対する組織的な取り調べを、誤った疑いをかけられた、不公正なものだと認識している点である⁵⁸⁾。

アーサー・ミラーは、魔女狩りで違反かどうかが問われているものは思想であり、証拠を示せないものであるため、その真偽の判断はできないことを指摘していた。その点から、トランプ大統領に魔女狩りの被害者だという認識を持つ自由はある。しかし『るつぼ』の2016年のアメリカでの公演が、当時のトランプ候補の、たとえばメキシコからの不法移民の対策案など、さまざまな排他的発言に表れる社会の不寛容を思い起こさせることを考えて

も、セイラムの魔女狩りにミラーがみた「本質」とは全くかけ離れているように思われる。「魔女狩り」ということばが一般化したことにより、このように自分の都合のよい形で使われる可能性もある。ミラーが生きていたらきっと、その発言が正当性を欠くことを、歴史的に、かつ事件にみた「本質」に根ざして、格調高い表現で指摘したことであろう。

注

- 1) Arthur Miller, "The Note on the Historical Accuracy of This Play," in *The Crucible: A Play in Four Acts*, with an Introduction by Christopher Bigsby (New York: Penguin Books, 1995 [1953]), 2.
- 2) ジョナサン・マンビィとの会話。荒木純子「『るつぽ』の世界」(講演)、シアターコクーン・オンレパートリー 2016『るつぽ』、2016年9月1日、Bunkamuraシアターコクーン稽古場にて。
- 3) Arthur Miller, *Timebends: A Life* (New York: Penguin Books, 1995), 330.
- 4) C. W. E. Bigsby, *Arthur Miller: 1915-1962* (London: Weidenfeld & Nicolson, 2008), 411.
- 5) Arthur Miller, "Why I Wrote 'The Crucible,'" *The New Yorker*, vol. 72, issue 32 (October 21, 1996), 160.
- 6) Arthur Miller, "History Around the Crucible," Massey Lectures, Harvard University, 1999年5月10日の、関連行事での質問への回答。
- 7) たとえば Miller, "Why I Wrote 'The Crucible,'" 164.
- 8) Brooks Atkinson, "At the Theater," *The New York Times*, January 23, 1953, 15.
- 9) Miller, *Timebends*, 331.
- 10) Bigsby, *Arthur Miller*, 413.
- 11) Arthur Miller, "The Crucible in History: The Massey Lecture, Harvard University," quoted in Harold Bloom, ed., *Arthur Miller's The Crucible*, New ed., Bloom's Modern Critical Interpretations (New York: Bloom's Literary Criticism, 2008), 104.
- 12) Bigsby, *Arthur Miller*, 23.
- 13) Nina Baym and Robert S. Levine, eds., *The Norton Anthology of American Literature*, 8th ed. (New York: W. W. Norton & Company, 2012), vol. E, 2110.
- 14) Nina Baym, ed., *The Norton Anthology of American Literature*, 6th ed. (New York: W. W. Norton, 2003), vol. E, 236-37.
- 15) Miller, *Timebends*, 331.
- 16) Jason Zinoman, "'The Crucible' Returns to Broadway," *The New York Times*, February 25, 2016, accessed, October 4, 2017, <https://www.nytimes.com/2016/02/28/theater/the-crucible-returns-to-broadway.html>.
- 17) Helene Stapinski, "Arthur Miller's Brooklyn," *The New York Times*, January 22, 2016, sec. N.Y. / Region, accessed, October 4, 2017, <https://www.nytimes.com/2016/01/24/nyregion/arthur-millers-brooklyn.html>.
- 18) Ben Brantley, "Shame and Guilt Drives Several New Productions, Which Is Good for Us," *The New York Times*, February 18, 2016, sec. Theater, accessed, October 4, 2017, <https://www.nytimes.com/2016/02/21/theater/shame-and-guilt-drives-several-new-productions-which-is-good-for-us.html>.

- 19) Matthew Schneier, "Ben Whishaw Makes Himself at Home in New York," *The New York Times*, March 4, 2016, sec. Fashion & Style, accessed, October 4, 2017, <https://www.nytimes.com/2016/03/04/fashion/ben-whishaw-crucible.html>.
- 20) 「トピックス | シアターコクーン・オンレパートリー 2016 るつぼ | Bunkamura」2016年10月7日、参照2017年10月2日、http://www.bunkamura.co.jp/cocoon/lineup/16_rutsbo/topics/post_3.html.
- 21) 谷岡健彦「(評・舞台) Bunkamura シアターコクーン「るつぼ」——不寛容な空気と共振」『朝日新聞』2016年10月27日夕刊、3ページ。朝日新聞社、聞蔵II。
- 22) Miller, "The Crucible in History," 108.
- 23) Miller, "Why I Wrote 'The Crucible,'" 164.
- 24) E. Miller Budick, "History and Other Spectres in Arthur Miller's *The Crucible*," *Modern Drama* 28 (1985): 535-52, quoted in Bloom, ed., *Arthur Miller's The Crucible*, 38, n4.
- 25) Paul Boyer and Stephen Nissenbaum, *Salem Possessed: The Social Origins of Witchcraft* (Cambridge: Harvard University Press, 1974), 22.
- 26) Lewis Funk, "Thoughts on a Train Bound for Wilmington," *The New York Times*, January 18, 1953, 260.
- 27) Nathaniel Hawthorne, *The Scarlet Letter: An Authoritative Text, Essays in Criticism and Scholarship* (New York: Norton, 1988), 35.
- 28) H. L. Mencken, *A Book of Prefaces* (New York: Alfred A. Knopf, 1917), 201-202.
- 29) Edmund S. Morgan, "Perry Miller and Historians," *Proceedings of American Antiquarian Society* 74 (1965): 11-18.
- 30) James Truslow Adams, *The Founding of New England* (Boston: Atlantic Monthly Press, 1921), x; Perry Miller, *Orthodoxy in Massachusetts, 1630-1650* (Boston: Beacon Press, 1959 [1933]), xii.
- 31) Miller, *Orthodoxy in Massachusetts, 1630-1650*, xviii.
- 32) アーサー・ミラー『るつぼ』倉橋健訳（早川書房、2008 [1984]）、100-101。
- 33) ミラー『るつぼ』、197。
- 34) Edmund S. Morgan, "The Puritans and Sex," *The New England Quarterly* 15 (1942): 591-607.
- 35) Edmund S. Morgan, "Arthur Miller's *The Crucible* and the Salem Witch Trials: A Historian's View" in *The Golden and the Brazen World: Papers in Literature and History, 1650-1800* (Berkeley: University of California Press, 1985), quoted in Bloom, ed., *Arthur Miller's The Crucible*, 41, 53.
- 36) Funk, "Thoughts on a Train Bound for Wilmington," 262.
- 37) Funk, "Thoughts on a Train Bound for Wilmington," 262.
- 38) Marion Lena Starkey, *The Devil in Massachusetts, A Modern Inquiry into the Salem Witch Trials* (New York: Alfred A. Knopf, 1949), vi.
- 39) 市場泰男「訳者あとがき」マリオン・L・スターキー『少女たちの魔女狩り——マサチューセッツの冤罪事件』市場泰男訳（平凡社、1994）、63-66。
- 40) Chadwick Hansen, *Witchcraft at Salem* (New York: George Braziller, 1969), xiv.
- 41) 市場泰男「訳者あとがき」、63-66。
- 42) ミラー『るつぼ』、188-189。
- 43) Boyer and Nissenbaum, *Salem Possessed*, xi, 22.

- 44) ミラー『るつぼ』、58。
- 45) Boyer, *Salem Possessed*, 22.
- 46) Emerson W. Baker, *A Storm of Witchcraft: The Salem Trials and the American Experience* (New York, NY: Oxford University Press, 2015), 246.
- 47) Baker, *A Storm of Witchcraft*, 225.
- 48) Baker, *A Storm of Witchcraft*, 268–75.
- 49) Dane Anthony Morrison and Nancy Lusignan Schultz, updated ed., *Salem: Place, Myth, and Memory* (Boston: Northeastern University Press, 2015 [2004]), 55.
- 50) Baker, *A Storm of Witchcraft*, 276–79.
- 51) Baker, *A Storm of Witchcraft*, 195.
- 52) Funk, “Thoughts on a Train Bound for Wilmington,” 262.
- 53) zingerplatz, *Arthur Miller, Salem, MA (1991) re: Witch City*, accessed, October 7, 2017, https://www.youtube.com/watch?time_continue=35&v=5lWrzVRRnLY.
- 54) Baker, *A Storm of Witchcraft*, 279.
- 55) Donald J. Trump, “This Is the Single Greatest Witch Hunt of a Politician in American History!” Tweet, @realDonaldTrump, (May 18, 2017), accessed, September 27, 2017, <https://twitter.com/realDonaldTrump/status/865173176854204416>.
- 56) Mary Beth Norton, quoted in Yasmeen Sherhan, “The ‘Single Greatest Witch Hunt of a Politician’ in History,” *The Atlantic*, accessed, September 27, 2017, <https://www.theatlantic.com/politics/archive/2017/05/the-actual-single-greatest-witch-hunt-of-a-politician-in-american-history/527223/>.
- 57) Baker, *A Storm of Witchcraft*, 257.
- 58) Norton, quoted in Sherhan, “The ‘Single Greatest Witch Hunt of a Politician’ in History.”

参考文献一覧

- Adams, James Truslow. *The Founding of New England*. Boston: Atlantic Monthly Press, 1921.
- Atkinson, Brooks. “At the Theater.” *The New York Times*. January 23, 1953, 15.
- Baker, Emerson W. *A Storm of Witchcraft : The Salem Trials and the American Experience*. New York: Oxford University Press, 2015.
- Baym, Nina, ed. *The Norton Anthology of American Literature*. 6th ed. New York: W. W. Norton, 2003.
- Baym, Nina, and Robert S. Levine, eds. *The Norton Anthology of American Literature*. 8th ed. New York: W. W. Norton & Company, 2012.
- Bigsby, C. W. E. *Arthur Miller: 1915-1962*. London: Weidenfeld & Nicolson, 2008.
- Bloom, Harold, ed. *Arthur Miller's The Crucible*. New ed. Bloom's Modern Critical Interpretations. New York: Bloom's Literary Criticism, 2008.
- Boyer, Paul and Stephen Nissenbaum. *Salem Possessed: The Social Origins of Witchcraft*. Cambridge: Harvard University Press, 1974.
- Brantley, Ben. “Shame and Guilt Drives Several New Productions, Which Is Good for Us.” *The New York Times*, February 18, 2016, sec. Theater. Accessed, October 4, 2017. <https://www.nytimes.com/2016/02/21/theater/shame-and-guilt-drives-several-new-productions-which-is-good-for-us>.

- html.
- Budick, E. Miller. "History and Other Spectres in Arthur Miller's *The Crucible*." *Modern Drama* 28 (1985): 535-52. Quoted in Bloom, ed., *Arthur Miller's The Crucible*, 21-39.
- Demos, John Putnam. *Entertaining Satan: Witchcraft and the Culture of Early New England*. New York: Oxford University Press, 1982.
- Funk, Lewis. "Thoughts on a Train Bound for Wilmington." *New York Times*, January 18, 1953, 260, 262.
- Godbeer, Richard. *The Devil's Dominion: Magic and Religion in Early New England*. Cambridge and New York: Cambridge University Press, 1992.
- Hall, David D. *Worlds of Wonder, Days of Judgment: Popular Religious Belief in Early New England*. New York: Oxford University Press, 1989.
- Hansen, Chadwick. *Witchcraft at Salem*. New York: G. Braziller, 1969.
- Hawthorne, Nathaniel. *The Scarlet Letter: An Authoritative Text, Essays in Criticism and Scholarship*. New York: Norton, 1988.
- Kamensky, Jane. *Governing The Tongue: The Politics of Speech in Early New England*. New York: Oxford University Press, 1997.
- Karlsen, Carol F. *The Devil in the Shape of a Woman: Witchcraft in Colonial New England*. New York: W. W. Norton, 1987.
- Mencken, H. L. *A Book of Prefaces*. New York: Alfred A. Knopf, 1917.
- Miller, Arthur. *The Crucible: A Play in Four Acts*, with an Introduction by Christopher Bigsby. New York: Penguin Books, 1995 [1953].
- . "The Crucible in History: The Massey Lecture, Harvard University." Quoted in Bloom, ed., *Arthur Miller's The Crucible*, 83-110.
- . *Timebends: A Life*. New York: Penguin Books, 1995.
- . "Why I Wrote 'The Crucible,'" *The New Yorker*. Vol 72, issue 32 (October 21, 1996). 158-64.
- ミラー、アーサー『るつぽ』倉橋健訳。早川書房、2008 [1984]。
- Miller, Perry. *Orthodoxy in Massachusetts, 1630-1650*. Boston: Beacon Press, 1959.
- Morgan, Edmund S. "Arthur Miller's *The Crucible* and the Salem Witch Trials: A Historian's View" in *The Golden and the Brazen World: Papers in Literature and History, 1650-1800* (Berkeley: University of California Press, 1985), 171-86. Quoted in Bloom, ed., *Arthur Miller's The Crucible*, 41-53.
- . "Perry Miller and Historians." *Proceedings of American Antiquarian Society* 74 (1965): 11-18.
- . "The Puritans and Sex." *The New England Quarterly* 15, no. 4 (1942): 591-607.
- Morrison, Dane Anthony, and Nancy Lusignan Schultz. Updated ed. *Salem: Place, Myth, and Memory*. Boston: Northeastern University Press, 2015 [2004].
- Norton, Mary Beth. *In the Devil's Snare: The Salem Witchcraft Crisis of 1692*. New York: Alfred A. Knopf, 2002.
- Schneier, Matthew. "Ben Whishaw Makes Himself at Home in New York." *The New York Times*, March 4, 2016, sec. Fashion & Style. Accessed, October 4, 2017. <https://www.nytimes.com/2016/03/04/fashion/ben-whishaw-crucible.html>.

- Sherhan, Yasmeen. "The 'Single Greatest Witch Hunt of a Politician' in History." *The Atlantic*. Accessed, September 27, 2017. <https://www.theatlantic.com/politics/archive/2017/05/the-actual-single-greatest-witch-hunt-of-a-politician-in-american-history/527223/>.
- Stapinski, Helene. "Arthur Miller's Brooklyn." *The New York Times*, January 22, 2016, sec. N.Y. / Region. Accessed, October 4, 2017. <https://www.nytimes.com/2016/01/24/nyregion/arthur-millers-brooklyn.html>.
- Starkey, Marion Lena. *The Devil in Massachusetts: A Modern Inquiry into the Salem Witch Trials*. New York: Alfred A. Knopf, 1949.
- マリオン・L・スターキー 『少女たちの魔女狩り——マサチューセッツの冤罪事件』 市場泰男訳。平凡社、1994。
- 谷岡健彦「(評・舞台) Bunkamura シアターコクーン「るつぼ」——不寛容な空気と共振」『朝日新聞』2016年10月27日夕刊、3ページ。朝日新聞社、聞蔵II。
- Trump, Donald J. "This Is the Single Greatest Witch Hunt of a Politician in American History!" Tweet. @realDonaldTrump (blog), May 18, 2017. <https://twitter.com/realDonaldTrump/status/865173176854204416>.
- zingerplatz. *Arthur Miller, Salem, MA (1991) re: "Witch City."* Accessed, October 7, 2017. https://www.youtube.com/watch?time_continue=35&v=5lWrzVRRnly.
- Zinoman, Jason. "'The Crucible' Returns to Broadway" *The New York Times*, February 25, 2016. Accessed, October 4, 2017. <https://www.nytimes.com/2016/02/28/theater/the-crucible-returns-to-broadway.html>.
- 「トピックス | シアターコクーン・オンレパートリー 2016 るつぼ | Bunkamura」。2016年10月7日。参照 2017年10月2日。 http://www.bunkamura.co.jp/cocoon/lineup/16_rutsubo/topics/post_3.html.

ENGLISH SUMMARY

Arthur Miller and Witch-Hunt: Historical Interpretations of *The Crucible*

ARAKI Junko

Arthur Miller's *The Crucible* (1953) is a play based on the Salem witch-hunt of 1692 in Puritan New England. It is also known as a work inspired by the Communist witch-hunts of the 1940s and 1950s in the U.S. The play is a classic and is still staged frequently with the most recent productions in 2016, on Broadway and in Tokyo, in which parallels were drawn with the current political atmosphere in both countries. This essay reflects on the relevance of the play today. Although the work is a fictional representation of events in Salem in 1692, the play could well stand as a historical analysis of the events that took place at that time. Scholarship on Puritanism since the 1930s has brought to light the humane aspects of Puritan culture rather than the dogmatic ones. Since the advent of new social history in the 1960s, extensive research on the Salem witch-hunt has been conducted and the mass hysteria has been explained in terms of psychogenic reactions to the social and political anxieties at the time. Viewed in the light of recent knowledge, *The Crucible* captures "the essential nature of the events," as Miller intended, and this 'essential nature' has echoes in an atmosphere of increasing intolerance in society today.

Key Words: Arthur Miller, *The Crucible*, Puritan Studies, witch-hunt, history